

「5000人の供食の奇跡物語」はすべての福音書に出てくる物語です。すべての福音書に出てくる奇跡物語だということは、この供食物語がキリスト教信仰において重要なことを示しているからです。まずわかることは、聖餐式と関連があることです。ルカ福音書の22章にある最後の晩餐や24章のエマオでの晩餐と、同じような単語が用いられていることから見ても、キリスト教が2000年間行ってきた聖餐と関連があることは明らかです。

5000人の供食物語は2匹の魚と5つのパンで5000人の男の人たちのおなかを満たしたという奇跡物語ですが、イエスの時代に人数を数えるときは女性や子どもは数えない習慣があったので、この奇跡物語で実際におなかを満たしたのは1万人はいたのではないかと考えることもできます。14節には「男が5000人ほどいた」とあります。イエスの話を聞くために集まっていた群衆の中に女性や子どももいたはずですから、5000人以上いたと思われるです。ヨハネ福音書の平行記事である6章冒頭の記事を読むと、パン5つと2匹の魚を持っていたのは少年でした。やはりヨハネ福音書でも男たちの数が5000人であったと書いてあります。このように、人数を数えるときに男性の大人しか数えない習慣があったわけで、実際の数はもっと多かったですように思われるのです。

さて、5000人の供食物語の主題は、5000人も膨大な人数のおなかをたった2匹の魚と5つのパンで満たしたという人数の多さに主眼があるわけではありません。イエス・キリストを信じる信仰によって日常生活全般が満たされるということに強調点があるのでしょうか。そして、その信仰の広がりや5000人という数によって強調されているのでしょうか。

考えることは、イエス・キリストが2匹の魚と5つのパンを取って、賛美の祈りを唱えて裂いたところに強調点があると思われるです。つまり、イエス・キリストが2匹の魚と5つのパンを多くの群衆のために裂いたという行為の中に、イエス・キリストが介在して多くの人のおなかを満たすという奇跡が起こったということです。イエス・キリストの話を聞くためにイエスの後を追いかけてきた人々は、当時の時代背景から類推すると、自分の命をつなぐパンや燻製の魚を持参していたはずで

今日の日本のようにコンビニが近くにあるわけではありませんから、自分の食い扶持は各人が持ち歩いていたと思われるです。そういう状況が大前提としてあるならば、一番合理的な考え方は、イエス・キリストが2匹の魚と5つのパンを裂く行為を目にした人々は、5000人以上の群衆に分け与えようとするイエスの行為を見て、自分の命をつなぐために持参していた自分の食べる分の食料を自分以外の人のために提供したということが、この奇跡物語を語り伝え聞いた人たちは想像したに違いないのです。ここに、キリスト教の基本的な考え方が隠されているのです。イエス・キリストが人々の間で介在すると、人々は隣人愛を發揮するのです。

キリストは神の子であるけれども、自分たち信業者も神によって創造されたものとして神の子なのです。自分たち信業者も神の子である以上、キリストは私たちの兄弟であり、私たち信業者もこの世で他者を救うキリストになるために召された者であるという自覚に生きる者とされたのです。それがイエス・キリストが私たち信業者の間に介在された理由なのです。このように考える当然の帰結として、隣人愛の思想が生まれたのです。

例えば、ルカ福音書17章でフアリアイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねる場面がで

てきます。それに対してイエスは「神の国は、見える形では来ない。『ここに』ある。『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」(20と21節)と答えています。「目に見えるようには来ない」と言うのですから、物質的な形態はとらないということです。

そうではなくて、私たち人間の中にあるということです。「中にある」ということは、人間の心の奥底深くに燃えている愛の炎という意味です。私たち人間の中には、目には見えない愛の炎が燃えたっていて他者を求め、神を求めているからです。さらには、神の国は人と人との交わりの中にあり、人との交わりの中にあるということです。つまりは人と人との交わりは愛であるので、この愛が人と人との絆を結び付けていくものとなるのです。

このように見てくると、5000人の供食物語の奇跡は、信仰者の心の奥底に燃えたいぎる愛の炎がイエス・キリストの介在によって喚起されて実現した出来事として初代教会では認識されたのではないかと想像するのです。自分の命をつなぐために持参していた食糧を他者のために提供することが、自分がよりよく生きようとしてイエスの話を聞くために追従してきた者たちの間に生じたと考えることがごく自然なことのように思われるのです。つまり、イエス・キリストの奇跡は、彼によって喚起されたそれぞれの愛の炎が結実した結果として実現したものと考えるのです。この意味で、キリストは奇跡を行わなかったともいえるし、キリストは奇跡を行ったともいえるのです。

5000人の供食物語の最後の17節には「すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると。十二籠もあつた」とあるように、すべての人が食べても、余りが出たことがわざわざ書いてあることに注目したい。自分たちが満腹するまで食べても、キリストの恵みにあずかる余分なものが残されているというのです。この余分なものが残されたことは満腹した人々が意識的に残したものであるというニュアンスはありません。

新型コロナウイルスになってから、教会で愛餐会を行くことをやめました。以前はポットラック方式で、それぞれが自分の食べる分にプラスして余分に料理を持参して愛餐会をしていました。それによって、食べられない人が出ないようにしていました。この余分な食べ物が出ることもまた、食べられない人が出ないようにする人間的な工夫です。常に、満たされない人の存在を意識することが信仰者としての生き方に大切だということが示されているのです。

ルカ福音書9章の5000人の供食物語では、意識的に残り物が出たようには書かれていません。神の配剤によって、余り物が出たことが書かれているだけです。このように書かれてあるのは、教会で皆が満腹して残り物が出た後、その余りものをどうするかが問われる形になっていたのでしょうか。

教会ではクリスマス献金の中から対外献金としていろいろな団体に献金をしています。それらの諸団体が行っているキリストの働きの幾分かでも担うために行っているのですが。これも、自分たちの教会が自己満足的に、自分たちの栄光だけを追い求めることにはないようにするためのものでもあるのです。私たち人間には、先ほど申し上げたように、他者のために自分を愛する愛の炎がある一方で、自分のためだけに生きる利己的な側面もあるのです。そのような偏りのある私たちが教会というキリストの器の中で鍛錬を重ねることで成熟していくように招かれていることに感謝したいと思います。